

Eureka VIII

六年制通信 No.33 令和3年2月5日(金)号

繰り返しと音読と暗記

前回、文学作品の朗読をお勧めしました。何がいいですかと聞かれるのですが、せっかくだすから太宰治の短編をどうぞと答えることにしています。太宰は文章がうまいですね。志賀直哉の『城の崎にて』も素晴らしい。私はときどき中島敦の朗読にチャレンジしますが、ものすごく難しくカミまくっています。彼の『文字禍』は傑作だと思いますが、「アッシリア人は無数の精霊を知っている。夜、闇の中を跳梁するリル、その雌リリツ、疫病をふり撒くナムタル、死者の霊エティンム、誘拐者ラバス等…」とか、大王の名前がアシュル・バニ・アパルだったり、老学者がナブ・アヘ・エリバ、死神はエレシュキガル、さらにピル・ナピシュチムの洪水だとか、あちこちに罫が張り巡らされています。面白いよ、一度試してごらん。

作品の朗読ではなく、『論語』でも英単語でも何でもいいのですが、記憶したいときは音読をする、これは本当に有効です。音読のすすめは古来いろんな先生が言ってこられましたが、英語の世界では同時通訳の神様と言われた國広正雄がはっきりと断言をして以降、積極的に取り入れる人が多くなりました。彼は「只管朗読」と言ったように記憶していますが、要するに音読をしなさいということです。それも中3の教科書でいいから500回音読しなさい、でしたかな。「只管(しかん)」とは「ただひたすら」という意味です。今はもうなくなってしまっていて残念なのですが、昔「百万人の英語(ENGLISH FOR MILLIONS)」という英会話のラジオ番組がありました。私はリアルタイムで國広正雄の講義を聴いていましたが、やはり音読を強く勧めていらっしゃいました。ちなみに、大きく息を吸い込んで一息で何行の英文が読めるか、そんな練習も効果的だということでした。もちろん、カタカナを読むような発音ではいけません(最初はそうなっても仕方ないですけど)。正しい発音とイントネーションに気をつけて何度も読むのです。面白いもので、読めば読むほど辛さはなくなっていくます。古代ローマの哲学者キケローもそう言っています。岩波書店の『キケロー選集』第9巻『老年について』36節に「肉体は鍛錬して疲れが昂ずると重くなるが、心は鍛えるほどに軽くなるのだ」とあります。中務哲郎訳ですから間違いのあろうはずはないのですが、ここにある「心」を「精神」と訳す方もいらっしゃいます。肉体と精神の対比です。肉体は負荷をかければ疲労しますが、精神は負荷をかけるとむしろ軽やかになるということです。例えば、グラウンドを10周走ると肉体は重くなりますが、朗読を10回すると最初の1回目よりもスムーズに読めます。もちろん肉体も疲労が回復すれば以前より強くなっているのですが、精神は疲労を感じずの間もなく鍛えられていくの

でしょうか。キケローの観察も面白いですね。

さて、暗記に音読が有効なことは君たちも実体験としてあると思いますが、覚え方にはいくつか注意が必要です。英単語を例にとりますが、昔の偉い先生方は1日3語主義を提唱してらっしゃいました。1日に3語を確実に覚えていくやり方ですね。理論的には、語彙力は増え続けるわけですが、私はこの方法で何度も挫折しています。ですから推薦できません。挫折の理由を考えてみると…。例えば1000語を覚えようとした場合、1日3語で約333日、11か月強、1年近くかかります。もう一度初めからチェックしようとするので2年必要です。1日に50語だと200日、6か月強、頑張れば年に2回繰り返すことができます。繰り返し覚える、私たちはよく何でも繰り返す行きの大切さを強調しますが、繰り返すとはどういうことか、それは接する回数を増やすということです。このことを意識して、同じ単語にふれる回数を増やすことを心掛けるべきです。1日に3語を覚えるのは、数日はできるかもしれませんが、2週間もすれば最初の3語は忘れてしまい、それにもう一度触れるのが1年後だとすると、結局永遠にやり直しをしているようなものです。正しい発音とアクセントで音読しながら、繰り返す回数を増やして覚えていきましょう。

さて、実はここからが大切なのですが、今度は「単語の意味を覚えた」とか「この単語の意味を知っている」とはどういうことか、それを確認します。語彙には狭い意味で十分なものと広い意味範疇を持つものがあります。これらを分けて考えなくてはなりません。例えば **apple** : リンゴ、これは狭い。しかし **get** : 手に入れる、これだけを覚えても **get** を知ったことにはならない。すべての文型で使える **get** には意味の広がりや注意すべき用法がたくさんあります。それらを覚えて初めて **get** がどういう意味かを知っていると言えます。ですから **apple** 型か **get** 型かで覚え方を変えないといけません。もうすでに覚えたと思っても、実はその語の一面に過ぎないということがよくあります。だから私たちは何度も辞書を引くのですね。

今週のおすすめ

・道尾秀介 『鬼の登音』 (角川文庫)

「あしおと」も「足音」ではなく「登音」と書くと、見ただけでも少し恐くなりますね。本作は著者の初めての短編集です。六編の短編はそれぞれホラー・ミステリーに分類されるのかなあ。適度にホラーとミステリーが混ざり合っています。短編はプロットがよくないと失敗しますが、プロットがよくても書き手に力量がないとやはりダメなものです。今回は面白く読めました。

文庫の帯には「6人の「S」による危険な罠。ねじれた愛、消せない過ち、哀しい嘘、暗い誘惑——。運命の檻に囚われた6人の男女」とありますが、このキャッチコピーも秀逸です。読みたくなりますよね。本書を読んだ後でもう一度見返すと、上手なコピーだと思います。この人の作品は『水の枢』以外、直木賞受賞作の『月と蟹』すら読んでいないのですが、また何か読んでみて面白かったら紹介しますね。

BGMは Perfume の チョコレート・ディスコ でした…。